

論文

日韓共同遺産としての朝鮮通信使遺産の保存活用

三宅理一*

1. 朝鮮通信使とは

朝鮮通信使は、江戸時代を通して朝鮮国王から江戸の将軍に派遣された外交使節団である。徳川政権が成立して早々に我国に派遣されるようになり、当初は秀吉による朝鮮侵攻の終戦処理を目的としていた。やがて、両国の関係が落ち着くと、通信使は将軍の交替を祝う慶賀の使節へと性格を変え、十数年おきに来日することとなる。慶長12年(1607)から最終回となる文化8年(1811)まで都合12回のミッションが組まれており、鎖国下の日本で唯一正式な外交関係を保った国として最大限の敬意をもって遇された。

交通機関が船と徒歩に限られたこの時代、通信使の往来には時間がかかり、漢陽(今日のソウル)から江戸までの往復に半年から8ヶ月から12ヶ月を費やした。そのことが逆に、道中の港町や街道町に通信使を受け入れるために大がかりな迎接(御馳走)体制を組ませることとなり、ソウルから江戸に到る街道、港湾、宿場が特に整備された。とりわけ迎接側の日本では、朝鮮側の使節団約500人に加えて、対馬藩からの嚮導役、通行地の各藩警護・随行役を合わせ、計1500人にのぼる人員の移動のため、今日でいうコンベンションや博覧会といったイベント遂行を目的とした都市整備や施設計画が実施されている。

近年、筆者を含め多くの研究者や研究機関が、朝鮮通信使の遺産をめぐる研究を行っており¹、日韓共同研究も進んでいる。2004年には3年間にわたる共同研究の成果を公開する「朝鮮通信使の道：日韓歴史都市会議2004」が釜山・密陽にて開催され²、また2007年の朝鮮通信使派遣400周年を記念して日本建築学会において「朝鮮通信使の道」展ならびに日韓シンポジウムが行われ³、さまざまな知見が発表された。両国に多くの遺構が存在することが改めて確認され、その保存活用の重要性が提起された。

本発表は、これまでの両国での研究成果にもとづき、朝鮮通信使に関わる両国の遺産を、近世の国際関係を示す「朝鮮通信使遺産」と規定し、その実態把握と保護のための方策を検討し、具体的な保存活用の道を探るものである⁴。

*藤女子大学人間生活学部人間生活学科教授

¹ 三宅理一『江戸の外交都市』鹿島出版会、1990、では通信使の寄港地であった岡山藩牛窓について、御馳走の次第、施設計画、その変遷について論じたものである。² 韓国建築歴史学会・朝鮮通信使に関する日韓学術シンポジウム実行委員会編『2004 韓日国際学術発表歴史都市会議—朝鮮通信使の道』釜山・密陽、2004年4月30日、5月1日³ 日本建築学会・日本イコモス国内委員会「朝鮮通信使400周年記念—朝鮮通信使の道」展、2007年12月20日—2008年1月20日、記念シンポジウム『朝鮮通信使の道』、2008年1月12日⁴ 本論考は2009年11月の日本イコモス国内委員会主催伊勢会議にて発表した内容を加筆訂正して執筆したものである。

2. 「朝鮮通信使遺産」の定義

2-1. 朝鮮通信使の経路

<朝鮮側の経路>

朝鮮通信使は漢陽（ソウル）から江戸までを往復するが、朝鮮国内と日本国内で、その移動の仕方が異なっている点に注意したい。朝鮮内では単に「通信使」とされ、清の北京に往復する使節団が「燕行使」（燕京＝北京）と呼ばれたのと比較される。史料からみて、漢陽から出発したのは三使（正使・副使・従事官）を中心とした100人程度で、残りの人員は各地から集められ、釜山に集合したものと考えられている。下行（漢陽から釜山）にあたっては、始めは幹線である嶺南大路を用い、途中で東寄りとなって安東、慶州を通過するのが一般的であったが、これは守令による通信使への接待等の公的行事をこなすことが理由であった。逆に、上行（釜山から漢陽）では、密陽、大邱、尚州を通る通常の嶺南大路を基本としたが、正使、副使、従事官が異なった経路を取り、分散的に帰京していたことがわかっている⁵。

<倭館（和館）の役割>

朝鮮通信使の派遣に際して橋渡しの役割を果たしていたのが対馬藩である。釜山に隣り合う草梁の地に当時の東アジアの外国人居留地の中で最大の面積（一万坪）を誇る倭館（和館）を有し、日朝間の外交と貿易に関する窓口となっていた。通信使の派遣は、対馬藩主から朝鮮側礼曹参議へ大慶参判使派遣に始まり、対馬において行聘の実施細目（講定節目）の交渉・決定を行う。それにともなって、朝鮮側での使節団の編成、船団の建造、式次第の確認がなされる。その内容を受けて日本側での迎接（御馳走）プログラムの策定がなされるが、その実務交渉をすべて対馬藩が行ない、施設設計を含む実際の迎接プログラムの検分は対馬藩の担当であった。従って、草梁の倭館は、朝鮮通信使の往来にあたってその準備段階から関与し、通信使の派遣に際して嚮導役の藩士を出していた。



朝鮮通信使の経路

⁵ 金聖雨『朝鮮通信使の漢陽―釜山間派遣経路及び経過都市』、「2004 韓日国際学術発表歴史都市会議―朝鮮通信使の道」釜山・密陽、2004年4月30日、5月1日、pp.2-8

<日本側の経路>

対馬から江戸に到る通信使の経路は朝鮮側と異なってほぼ固定されており、経路にある各藩がリレー式に通信使の御馳走役を担当した。嚮導役の対馬藩主ならびに藩士は全行程を通信使とともに動く。大坂までは海路、そこから京都までは川船で淀川を遡り、京都からは一部中山道、近江八幡のあたりでは「朝鮮人街道」と呼ばれる専用の街道を経る。名古屋からは東海道で江戸に到る。従って、海路に関してはそれぞれの港町で迎接が行われ、陸路では宿場町で御馳走となった。3回については江戸から日光まで日光街道を経て東照宮に参詣している。

2-2. 朝鮮通信使遺産

朝鮮通信使に関する歴史遺産は、通信使の往来を保証するために経路沿いに整備された施設群と、通信使が残した文物に分かれ、その内容は、港湾施設や道路といった土木構築物から、客館、御茶屋などの建築、さらには書画の類までさまざまである。交通施設としては、港町における波戸、雁木、下行場、常夜燈等の港湾施設、通信使のために特に整備された街道（朝鮮人街道）、河川にかける仮設の舟橋などがあつた。迎接（御馳走）に際しての施設整備には、藩の財政状況や都市政策によって新築で対応するケース（藍の島、上関など）と、既存施設の増改築で対応するケース（鞆浦、牛窓、小田原など）があつた。後者の場合、既成の施設としては御茶屋、寺院の客館、本陣などがあり、さらに一般民家を借り上げて全面的に改装する例も少なくない。

「朝鮮通信使遺産」といった場合、上記の施設や空間、文物で今日にまで残るものを指すのが一般であるが、藍の島のように考古遺跡となっている場合もある。今後の調査や発掘が進むと、さらに多くの遺構や遺跡が発見されるものと思われる。朝鮮において通信使の接遇は、国王の使節を地方の守令が迎えるという構図で各地の客舎等の迎賓施設でなされており、その遺構が残存する。倭館については釜山市内に遺構ならびに考古遺跡が確認され、その復原が待たれている。

通信使の往来にあたって、日朝とも既成の街道体系（嶺南大道や東海道）の上に重ねてそのロジスティクスを確保するのが一般的であるが、迎える側の日本では、「朝鮮人街道」の設定など新たに特別な計画を施す例も見られる。街道経営にあたって本陣・脇本陣の制をつくって民間委託を旨とした日本では、通信使の迎接もその延長に置くが、中央集権国家の朝鮮では、直営の官衙建築（客舎）をもってそれに充てる。日本では藩経営の御茶屋が迎接に用いられるのは、西国の港町においてである。

現在、朝鮮通信使遺産をめぐって、「朝鮮通信使のために計画された建造物」と「朝鮮通信使ゆかりの建造物」との間で、微妙な差異があることは知っておかなければならない。前者は、通信使の往来を目的として整備（新築、増改築等）されたことを基準にしているのに対して、後者は既存の建造物を含めて通信使が用いた事実重点が置かれている。朝鮮国内では、使節団は漢陽から分散して街道を下り、釜山で船団が編成された時点で初めて正式な外交団となる。しかし、三使の存在を基軸として眺めると、彼らが地方での接遇等の行事をこなしながら移動する際に迎賓施設を用い出来事が発生したという点で通信使遺産のカテゴリーに属すると判断される。

通信使の手になる書画は、各地の博物館や図書館に所蔵されたものも少なくなく、さら

に個人造で多く分布している。公文書の類は、朝鮮政府、対馬藩によるものがそれぞれ残されている。

3. 遺産の分布

3-1. 施設立地の特徴

朝鮮通信使遺産の立地を考察すると、日朝の違いが明らかになる。中央集権国家である朝鮮では、都市の格が守令の官位によって差別化され、安東、慶州、尚州など正三品以上の都市、従三品以下の密陽や東萊の場合とでは、扱いが異なる。特に安東や慶州では、三使の滞留は公的な行事として周辺地域の幢主や察訪等が集合して大がかりな宴を催す。客舎等の迎賓施設は、その点で国王の偉業を示す一種のパフォーマンス・スペースでなければならなかった。

日本の場合は、幕府からの補助金はあるにせよ、基本的には藩による財政出動を拠り所とした日本では、藩の経済力（石高）、幕府との関係（外様、譜代）によって迎接の様相が異なってくる。港町では、都市部を避けて島に新規の迎接施設群を建設した福岡藩（藍の島）のような例もあるが、一般には既成の町並みに隣接して（岩国藩上関）、あるいは町中に入れ込んで迎接施設群を配置する（福山藩鞆浦、岡山藩牛窓）のが普通であった。東海道路に入ると、寺院の客館を用いて寺町に通信使を分散配置した例（彦根藩彦根）、本陣、脇本陣等を用いて宿場町の中に分散した例（小田原藩小田原）など多様である。ニュータウン的な手法よりは、既成の町並みの再編成という例が多いようだ。都市の規模が比較的小さい（人口規模でいうと3000人程度）の港町では、1500人規模の通信使一行を収容すると街の規模が一変し、町全体が通信使のための外交都市に変容してしまう例も少なくない。逆に、参勤交代の集団が常に行き来した中山道や東海道の宿場町（特に城下の）では、町のキャパシティも大きく、既成の宿泊施設の改装だけで余裕をもって通信使を受け入れることができた。

3-2. タイポロジー

日朝両国とも、通信使施設の形式は、既成のタイポロジーを下敷きとして発展させた。

<朝鮮>

客舎は中央からの官吏、外国からの賓客を迎えるために設立されたもので、中央には宮闕を示す闕牌と国王を示す殿牌が置かれた主舎（大庁）、左右に宿泊用の房が並ぶ翼舎が配された平面形式、ならびにその二つの機能をひとつの建物に統合させた形式の二タイプがある。密陽の嶺南樓のようにその横に楼閣がつき、接客スペースとして用いる例が多い。定期的に守令が向闕臨拝を行い、賓客の宿泊を引き受けた。通信使の往来に際して用いられた慶州客舎や尚州客舎（商山館）は現存している。

<倭館>

草梁の倭館の場合はユニークである。朝鮮王朝の資金で対馬藩・朝鮮の共同の建築組織ができ、貿易部門は対馬の武家屋敷をモデルとした館守家、開市大庁、裁判家等が造られ、外交部門は大庁をともなった朝鮮客舎の形式をとりながら、唐破風、式台、座敷の日本式空間が融合され、日朝混淆形式が生み出された（参判家など）。既に倭館の建築は消滅して

いるが、絵図、図面、写真が豊富に残っており、復原は困難ではない⁶。

<日本>

日本においては、既成の武家建築が援用され、三使の宿泊に用いられた御茶屋、客館、本陣は、それぞれ既成の形式にのっとっているが、使節の人員数や接待の仕方に応じて大幅な増改築されている。新設の上関の使館は、武家屋敷にのっとりて楼閣をともなった特異な形式となっている点が着目される（現在は石垣のみが残存している）。

3-3. 分布

今日、朝鮮通信使遺産はソウルから東京に到る各地に分布しているが、残存状況はまちまちである。韓国内では、開慶、安東、尚州、慶州、密陽は、朝鮮時代の都市構造を残し、その中で官衙や迎賓施設が立地して（移築されたものもある）、遺産としてのオセンティシティを保っている。草梁の倭館（釜山）については、階段、石垣等が残っているが、建造物は失われてしまった。しかし、当時の港湾施設等を含めて、倭館建築の位置はすべて確認されており、今後の都市計画の進展に応じて復原が可能である。

日本国内では、対馬、壱岐等の島嶼部、さらに海路に沿った上関、鞆浦、牛窓等の港町では都市構造を含めて当時の遺構が多々残っている。鞆浦では、寺院の客殿（福禅寺対潮楼）に加えて港湾施設（波戸、雁木、常夜燈）がほぼ完全なかたちで残り、牛窓では、明治に入って大幅に改装されたものの、御茶屋の一部、湊在番所などが残っていることが確認された。さらに近江八幡や彦根で寺院の客館（宗安寺書院など）が当時の姿を残している。江戸期の建造物が明治以降大きく改造されているケースが多いので、全国での調査が進むにともなって、さらに関連施設が発見されることが期待されている。

通信使に関する記録は日韓双方で大量に残っているが、通信使自体が残した公式記録を読むと、景観面では鞆浦と興津が「日東第一」と称賛されている。鞆浦はその景観的特質を含めて朝鮮通信使遺産として第一級の資質を保っているが、逆に興津の場合は、埋め立て工事のため、当時の景観は消滅してしまった。今後の調査では、建造物に加えて、景観的特性を含めた総合的な遺産評価が必要である。

4. 遺産の保存活用

4-1. 遺産評価の高まり

朝鮮通信使遺産に対する評価は近年とみに高まっており、日韓でその保存活用をめぐる動きが活発になっている。当初は、瀬戸内海や島嶼部の港町が過疎化に直面し、地域振興の切り口として朝鮮通信使の歴史を発掘することが有効に働いた。文化観光を呼び起こし、施設整備、文化教育等に国や県の予算を呼び込むことが可能であった。それと同時に市民意識が高まり、多くの NPO や住民団体が、朝鮮通信使を手掛かりに歴史と町づくりに取り組みようになってきた。朝鮮通信使ゆかりの市町村の自治体、住民団体等が集まった「朝鮮通信使縁地協議会」の発足はそのことをよく物語る。毎年開催地を変え、学術発表、住民交流、啓蒙活動、通信使行列などのさまざまなイベントを行い、韓国との交流も盛んに

⁶ 夫学柱『近世日朝通交拠点の形成と展開に関する研究—「草梁倭館」の建設と発展プロセスの解明』2006年度慶應義塾大学博士請求論文（2007年3月）が、草梁に倭館の建設プロセスを明らかにしている。

